

## 『ノーサンガー・アベイ』の「悪人」たち

中 尾 真 理 \*

*Northanger Abbey and its 'Evil' Characters.*

Mari NAKAO

## 要 旨

『ノーサンガー・アベイ』の副次的人物のうち、イザベラとジョン・ソープ、ティルニー大佐とティルニー将軍は、主人公のキャサリンが初めて「世の中へ出て行く」際に出会う「悪人」たちである。四人のうち、イザベラとジョンは、流行語や誇張した言葉、身勝手な行動から、キャサリンもやがてその利己的で浅薄な性格を見抜くようになる。だが、ティルニー大佐とティルニー将軍の場合は、エレガントな弁舌とマナーのおかげで、キャサリンは最後まで、彼らの性格にイザベラと同じ不誠実と金銭欲が潜んでいることに気がつかなかった。

喜劇という枠組みのなかで、オースティンがどのように「悪」を描き、どのように彼らの「悪」に報いているかを、温泉リゾート都市であるパースと由緒ある「土地」（ノーサンガー・アベイ）との関連で考えてみた。

## はじめに

『ノーサンガー・アベイ』（*Northanger Abbey*）はジェイン・オースティン（Jane Austen）の作品の中でも最も喜劇的な要素の強い作品である。オースティンの喜劇的特質である（1）テンポの良さ、（2）確かな現実認識に基づいた確で簡潔な（胸のすくような）描写、（3）楽天的なハッピー・エンディング、が明確に表れた作品である。にもかかわらず、この小説はオースティンの作品の中では余り重視されず、思春期の習作的な作品群と『自負と偏見』（*Pride and Prejudice*）や『理性と感情』（*Sense and Sensibility*）という初期の作品との間の中間的なものと見なされることが多い。それはこの作品が、「無邪気で未経験な若い娘が世の中に出ていく」（innocent young lady's entrance into the world）という、当時おおいに流行していたセンチメンタルな小説（Sentimental Novels）のパロディ（parody）を全体の枠組みとしていることに起因している。また、同じく18世紀末に大流行したゴシック小説（Gothic Novels）のパロディも取り入れられており、もし本作品への興味がこうしたパロディ

としての面白さのみかかってくるのであれば、喜劇としての笑いの質は軽いと言わねばならないだろう。

オースティンの他の作品では、どれも本質的には同じ喜劇であるが、例えば『マンズフィールド・パーク』(*Mansfield Park*)のように重い雰囲気をもっていたり、『エマ』(*Emma*)のように人間の複雑で微妙な問題を扱っていることが明白で、作者の姿勢や作品のテーマに深みが感じられないという不満は少ないのである。また、軽快な持ち味の『自負と偏見』にしても、その笑いの中には既成の秩序をひっくりかえす破壊力が込められている。

では、『ノーサンガー・アベイ』にはそのようなテーマの重みも洗練された技術も、破壊的な力もないのだろうか。流行小説のパロディであり、パースという流行の発信地を舞台に、そこに群がる人々の生態を描いた風俗喜劇風の小説なのだろうか。

本論は以上のような視点から、『ノーサンガー・アベイ』をその副次的人物 (*minor characters*) を中心にして読み直し、彼らの「悪」がどのように描かれているかということからこの喜劇の道徳的側面について考えてみようというものである。

## I

### オースティンの道徳性と芸術性

一体に、オースティンの作品が、「喜劇」(*comedy*)という一定の範囲に限定されているにもかかわらず、高い評価を受けてきたのには、次のようなことが理由として考えられる。それは(1)(良くも悪くも)中産階級の健全な道徳意識を貫いていること、さらに(2)喜劇作品としての客観性を最後まで保っていること、の2つである。とくに、モラルリストで押し通したことが、彼女の作品がヴィクトリア朝の人々に好意的に迎えられ、その後も一般読者の支持を得る最大の要因となったと言えるだろう。オースティンのモラルについては、シャーロット・ブロンテ(*Charlotte Brontë*)がオースティンの「お上品さ(生まれの良さ)」(*gentility*)に対する反感を述べて以来<sup>1)</sup>、多くの批評家はその体質を問題にしてきた。それは多くの場合、どの程度階級的なものであったか、どの程度保守派(トーリー)的なものであったか、どの程度急進的(*Jacobin*)なものであったかという具合に議論されてきた<sup>2)</sup>。また、近年はフェミニズム意識の高まりとともに、興味深い指摘も次々となされ、オースティンの伝記を残した兄ヘンリー・オースティン(*Henry Austen*)や甥のエドワード・オースティン・リー(*Edward Austen-Leigh*)ら男性の家族が中心となって作り上げてきたオースティン像への見直しが行われている<sup>3)</sup>。これについて深入りする余裕はないが、ただ、オースティンの小説には、当時としては珍しく、理性的に行動できる女性と、女性を対等な存在として認める男性とが描かれているということだけは指摘しておきたい。

また、オースティンの作品の芸術的完成度の高さについても、スコット(*Sir Walter Scott*)を初め、当初から注目を集めてきた。メアリ・ラセラス(*Mary Lascelles*)やウォルトン・リッツ(*A. Walton Litz*)ら優れた批評家たちは特にこの点に注目してきたのである<sup>4)</sup>。

以上、二つの傾向の他に、いまひとつ第三の傾向として、歴史の流れの中でオースティンをとらえようとする傾向が見られる。この流れは作品研究そのものよりも、むしろ伝記的な研究や、時代の研究に力点をおくものである<sup>5)</sup>。こうした傾向の研究書はますます増加する傾向にあるが、オースティンの時代と社会が既に現代から遠くなり、特にアメリカの読者にとっても理解しにくくなったことが背景になっていると思われる。この傾向はややもすると、作品が資料として使われるだけで終わってしまうという恐れがある。『ノーサンガー・アベイ』も作品

そのものの意義よりも、摂政時代の風俗をよく示し、パースの雰囲気と正確に伝えているという点で<sup>8)</sup>評価される傾向があるのは残念なことである。

### 『ノーサンガー・アベイ』の問題点とその成立

『ノーサンガー・アベイ』は発表されるまでにいくつかの困難があった。チャップマン (R. W. Chapman) によると<sup>7)</sup>、これは始め、『スーザン』(Susan) という題名で1798年から1799年にかけて執筆され、1803年には出版されるはずであったが、結局、出版されないままに終わった。その後、オースティンは兄を通じて1809年に原稿を買い戻す交渉をし、実際に原稿を買い戻している<sup>9)</sup>。現在の『ノーサンガー・アベイ』には冒頭に「作者からのお知らせ」(Advertisement by the Authoress) がつけられているが、その中で作者はこの作品が1803年には完成しており、それから13年の月日が流れてしまったとの断わり書きをしている。以上のことからすると「お知らせ」は1816年に書かれ、この時に女主人公の名も1803年当時のスーザン (Susan) から、現在のキャサリンに改められたと思われる。オースティンは1817年の手紙でもまだミス・キャサリンが出版されていないことに言及しているが<sup>9)</sup>、その年の七月には本人が亡くなってしまったので、結局、生存中の出版はなかったわけである<sup>10)</sup>。

このように『ノーサンガー・アベイ』は執筆開始から出版までに相当の年月がかかっている。その原因のひとつとして、作者自身が作品に必ずしも満足していなかったという憶測も可能だが、これには賛成できない。チャップマンも、成立に紆余曲折はあったが、作品の内容は少なくとも1803年の完成以降、大きな変化はなかっただろうと述べている<sup>11)</sup>。問題は『自負と偏見』と同じで、熟年期の作家の目から見て、若さあふれるこの作品が「軽すぎ、気が利いていて、きらきらしすぎている (too light, and bright, and sparkling) ように思えたのではなかったか」ということである<sup>12)</sup>。

次に作品の構成上の問題である。オースティンの作品は通常、三部からなるのが普通だが、この作品は二部からなっており、さらにその比較的短い内容が、前半と後半で舞台を異にしている。つまり前半のパース (Bath) を舞台とする部分では主に 'Sentimental Novels' のパロディとして物語が進行し、後半の修道院 (Abbey) を舞台とする部分で、ゴシックのパロディが進行する。このように二重のパロディの中心である主人公は滑稽なだけの存在だけで終わってしまうのではないだろうか。

結論から言うと、この作品は前述のように、パロディという枠組みに沿っているが、それにもかかわらず、全体としては主人公のキャサリンが自ら判断し、行動できる女性になるに至る過程を追っている。一部・二部を通じて(一貫して)、キャサリンの内面の成長が扱われているからである。

17歳のキャサリン・モーランド (Catherine Morland) はパースの町で世間へのデヴューを果たし、ティルニー一家 (the Tilneys) とソーブ兄妹 (the Thorpes) を知る。初め彼女はイザベラ (Isabella Thorpe) を「親友」(confidante) と思い込み、ジョン・ソーブ (John Thorpe) の虚言にだまされるが、ヘンリー・ティルニー (Henry Tilney) の助言で次第に自分で考え、判断し、行動するようになる。さらに、ノーサンガー・アベイに移ってからは、そこがかつて修道院であったことからゴシックの空想を働かせてティルニー将軍にあらぬ疑いをかけるが、これもヘンリー・ティルニーに諭されて、その迷いから醒める。このような経験を通して、キャサリンは精神的に自立し、ヘンリーと結婚して名実ともに一人前の女性となる。

以上のように、ドン・キホーテのような迷夢と失敗を繰り返すにもかかわらず、キャサリンは最後までヘンリー (=読者) の好感を失わない。それは、彼女の持ち前の率直さ、彼女自身

の健康な回復力（精神的柔軟性）、さらにヘンリー・ティルニーが彼女に常に示す尊敬のおかげである。以上は既に別のところで検証したことなのでそちらを参照していただきたい<sup>13)</sup>。ここでは以上の認識をふまえた上で、議論を先に進めることにしよう。便宜上、物語の展開にしたがって、パースの部分とアベイ（修道院）の部分に分け、それぞれの副次的人物と彼らの「悪」をとりあげ、彼らがキャサリンにどのような「悪」を行い、それがどのように処理されていくのかを見ながら、作品のモラルの質について考えることにしたい。

## II

### リゾート都市パース

『ノーサンガー・アベイ』はキャサリン・モーランドが、およそ小説の女主人公とは似ても似つかぬ人物であることを、笑劇（Burlesque）風に、あるいはパロディ風に語り始める第一章から始まる。物語は快調なテンポで二章へ進み、舞台は早くもパースへと移される。このパースこそ、前半の主な舞台であり、17歳の世間知らずの少女（innocent young lady）キャサリンが、初めて世間に登場（début）する晴れ舞台なのである。彼女はこの地でさまざまな人に出会い、経験を深めていく。キャサリンが世の中を知るきっかけはパースの町にあり、したがってパースの性格を知ることが、ここに登場してくる人物たちを知ることにもつながると思われるので、まずパースについて考えてみることにしたい。

パースは温泉保養都市、今で言うリゾート都市で、小説の前半部はそのファッションナブルな町の性格を抜きにしては語れない。パースはローマ占領時代から温泉として利用され、湯治客で賑わっていたが、17世紀には国王や上流の人々も長期滞在する洗練された社交の町に変身していた。湯治客の歓楽を健全で洗練されたものにしたのは、ボー・ナッシュ（Beau Nash）と呼ばれたリチャード・ナッシュ（Richard Nash）（1674-1761）の功績だと言われる。彼が儀典長（Master of Ceremony）を務めていた時代（1705-61）にパースはその最盛期を迎えたと言われている<sup>14)</sup>。

だが、一時はロンドンを凌ぐといわれたこの町も、ナッシュの死後は徐々に衰え、引退した中産階級が保養や療養をする町に変わっていった。

さて、『ノーサンガー・アベイ』の舞台となる時代は、前述のように、1798年から1803年にかけての数年間（作品の執筆開始から、作品としてはほぼ完成したと思われる時期）で、これはNashの没後36年から40年ばかりたったころと推定される。

この時期には、衰えたりとはいってもパースは、社交都市としての華やかさをまだ十分にとどめていた。これが*Persuasion*になると、同じパースでもナポレオン戦争後の時代に設定されており、戦役で年金を受けた海軍軍人が大挙して引き揚げ、この地で年金生活を送るようになった様子を描いている。ほんの十年ばかりの違いだが、パースは大きく変貌したのである。

だが、『ノーサンガー・アベイ』ではパースはまだ、老人や病人の都市ではなく、ダンディなティルニー大佐（『戦争と平和』のアナトーリー・クラウギンといった人物）も休暇を過ごしにやってくる、活気あるリゾート都市だった。少なくとも、オースティンはそのつもりで描いたと思われる。だからこそ、ここにはソープ一家のような新興中産階級（イザベラの父親はロンドンの弁護士である）の一家も来るし、裕福な田舎者アレン夫妻（the Allens）も、ソープ家より遙かに社会的地位の高いエレガントな地主の一家ティルニー一家も、年頃の息子や娘を伴って滞在しているのである。イザベラはパースをロンドンやターンブリッジ・ウェルズ（Turnbridge Wells）と比較しているが<sup>15)</sup>、ターンブリッジ・ウェルズも、ケント州にある温

泉町で、パースの儀典長ポー・ナッシュが同じく儀典長を兼任したこともあるファッションブルな町である。

### パースでの都市生活

パースでの生活は主人公のキャサリンの目を通して描かれる。キャサリンはフラートン (Fullerton) という小さな村の出身である。そこでは毎日が単調で、「アレン夫人をたずねる以外になんの楽しみもない」(and there I can only go and call on Mrs. Allen)(p.79) という状態であった。初めて都会へ出て来たキャサリンにとって、パースは変化に富んだ毎日を送れるところだったわけである。パースに飽きて退屈することなどないだろうと彼女は述べている。そこでの彼女の日課は商店での買い物であり、毎朝、鉱泉室 (Pump Room) を訪れてグラス一杯の鉱泉を飲むことであり、クレセント広場での散歩であり、夜は夜で芝居見物や舞踏会に出かけることであった。

その中でも「いろいろな人を眺めながら・・・行ったり来たり一時間ばかり気取って歩く」(where they paraded up and down for an hour, looking at everybody)(p.25) ことが、パースの刺激に満ちた都市生活を象徴するものであった。大勢の人に交じることから生じる刺激、しかもどの人とも固定した関係を持たないで暮らすことができるという気楽さ、保養都市ならではの恩典を、こうした気取ったそぞろ歩きは与えてくれるのである。

パースの生活は、ロンドンほどには変化に富んではないとヘンリー・ティルニーは指摘する。だが、キャサリンは「ここではどの通りに行ってもいろいろな人たちを見ることができます」(・・・ but here I see a variety of people in every street)(p.79) と、フラートンに比べてパースの都会ぶりを強調している。

同様に、アレン夫人も

"Bath is a charming place, sir; there are so many good shops here.—We are sadly off in the country・・・Now here one can step out of doors and get a thing in five minutes"(p.29,)

「パースは魅力的なところです。ここにはたくさん、いいお店があります——田舎では私たち哀れな生活ですの・・・それがここだと玄関さえ出れば、5分で品物を手に入れることができるのですから」

と、パースの魅力を語っている。パースは坂の多い小規模な都市であるから、女性でもたいていのところへ歩いていける。しかも流行の商店が立ち並び、5分も歩けば買い物ができるというのであるから、流行に敏感な人間にとってこれ以上魅力的なところはないだろう。こうした利便性は買い物だけでなく、劇場や社交場 (賭博も含まれる)、キャサリンがゴシック小説を借りたと思われるファッションブルな貸本店など、娯楽・消費生活の一般に言えることでもある。これもまた、都会生活の特質であろう。反面、パースでの初めての舞踏会 (2章) でキャサリンが味わったように、都会生活には、無名であるということ、孤独に陥るといった危険性もあるのだが……

### パースの登場人物・アレン夫人

このようなリゾート都市に集まる人々といえ、享乐的な、単純な人物が全面に出てくる。まず、アレン夫人。彼女はキャサリンのシャペロン、つまり付き添いの既婚夫人であるが、そこはパロディ仕立てで展開する小説であるから、後見人のキャサリンになんら適切なアドバイスを発し得ない頼りない人物となっている。(実は、この頼りなさが、キャサリンの自立を促すことになる)

彼女は「つきあってみても(彼女と)結婚するほど好きになってくれた人がいたのが不思議だと言う以外に何の感情も呼びさまさない」(…… whose society can raise no other emotion than surprise at there being any men in the world who could like them well enough to marry them)(p.20) という人物で、唯一の関心は服飾にある。オースティンはこのようなつまらない人物の口を通して、時に思わぬ真実を伝えるものだが、この小説でも、モスリンの品定めができるということから、初対面の青年の人物を正しく評価するという離れ業を見せてくれる。ロウアー・ルームズ(Lower Rooms)での舞踏会で、ヘンリー・ティルニーはアレン夫人の服を見て、そのモスリン地の値踏みをした。するとたちまち、夫人は彼に関心を抱き始める。そして彼がモスリンに目が利くのはいつも妹のドレス選びの相談にのっているからだということがわかると、彼女は即座に、彼が信頼できる人物であることを見抜くのである。

“Men commonly take so little notice of those things……You must be a great comfort to your sister, sir.” (p.28)

「男の方はたいてい、こういったことには関心を持たないものですが……妹さんにとってさぞ頼りになることでしょう」

その通り、ヘンリー・ティルニーは、常に女性に同情的であり、傍若無人に振る舞うことが男らしさの表明であると勘違いしているジョン・ソープとは、その点で対照的な人物なのである。ノーサンガーの家でも彼だけが妹の理解者(父親のティルニー将軍は絶対的な家長である)であることは第二部で明らかにされる。

アレン夫人はまた、エリナー・ティルニー(Eleanor Tilney)の普段の服装から、ティルニー家の格式を見てとることもできた。

“Go by all means, my dear: only put on a white gown; Miss Tilney always wears white.” (p.91.)

「是非行ってらっしゃいな。でも、白いドレスを着ていらっしゃいな。ミス・ティルニーはいつも白いお召しものですから」

いつも白いお召しものを着ていられるのは、家が裕福であることを指し示すだけでなく、ミス・ティルニーの「高潔な心」(elegance of mind)をも示しているとウォーナー(S.T. Warner)はこの部分を引用して指摘している<sup>16)</sup>。

### パースで出会う悪党たち

パースでキャサリンは3人の軽薄な「悪人」に出会う。ジョン・ソープ、その妹のイザベラ・ソープ、それにティルニー大佐(Captain Tilney)である。彼らはリゾート都市パースがひ

きつける典型的な若者である。

パースには歓楽目当ての新興中産階級の子弟もやってくる。キャサリンの兄ジェームズ (James Morland) のオックスフォードでの学友ジョン・ソープはそうしたひとりである。陽気で、軽薄な学生である彼は、文学などには関心がなく、馬とギッグ (gig) という馬車に夢中である。ギッグは男性のための軽快な乗用馬車で、シェイズ (chaise) やコーチ (coach) のような家族用の箱型馬車とは異なっている。このあたりはスポーツ・カーにうつつを抜かず現代の若者の生態と変わりがない。彼のようなタイプこそリゾート都市にふさわしい人物だろう。彼は陽気で金離れがよく、無思慮で虚栄心が強く、つまり、パースのような町にとっては理想的な消費者だからである。

以上のような彼の性格にキャサリンは多に悩まされることになる。そして、それがこの小説の前半部分のプロットの主要な部分を形成する。例えば、彼にはなんでも誇大に表現する癖があって、走った距離をことさらに長く言ったり、本当はおとなしい馬なのに暴れる危険性があるといってキャサリンを脅えさせる。このような行動は自分を誇大に見せたい気持ちがそうさせるのだと解される。また、彼はキャサリンにダンスを申し込んでおきながら、平気ではあったらかしておいたり、ティルニー兄妹と先約のあるキャサリンを強引にドライブに誘うという傍若無人で強引な振る舞いを見せる。(この横暴さが、センチメンタル・ノヴェルズでか弱い女主人公たちを苦しめる不良貴族の乱暴のパロディとなる) この乱暴な振る舞いも、彼の虚勢であることは明らかだ。

ジョン・ソープがこの小説で「悪党」 (villain) 役をつとめているのは確かだが、実は、それほど危険な男性ではない。彼がむしろ、おめでたい単純な人物であることは、次のような彼の言葉づかいから明白である。まず、彼は盛んに悪態をつき (これは虚勢をはっていることを示す)、語彙が貧困である。褒めるときには、必ず「豪勢な」(famous) という形容詞をつける。また、「おかしな (形容詞)」(quiz)、「おかしなやつ (名詞)」(quizzer)、「からかう (動詞)」(quiz) という流行語を盛んに用いる。この quiz (quizzer) は、18世紀以降、口語俗語として盛んに用いられるようになった新語で、オックスフォード英語辞典 (The Oxford English Dictionary) では初出が1782年(名詞の場合)となっている。S・ジョンソン (Samuel Johnson) の「英語辞典」(A Dictionary of English Language)(1755) には収録もされていないという新しい流行語なのである。こうした流行語を好んで使うところにも、彼の軽薄な学生気質が現れているといえるだろう。キャサリンもティルニー兄妹も「quiz」なる語は使わないのである。

### イザベラ

ジョンの妹のイザベラも、キャサリンを裏切る役どころである。彼女はキャサリンより4歳年上の21歳で、表面上はキャサリンの「忠実な年上の親友」として振る舞う。だが、彼女は小説ならばゴシック小説しか読まず、サミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson) など読んだこともない軽薄な娘で、キャサリンにとってよい手本となるとはとても言えない。彼女のパース滞在の目的は男性、それもハンサムで裕福な結婚相手を獲得することである。結局、イザベラはキャサリンの兄ジェームズと婚約するために、キャサリンを利用するのだが、モーランド家がそれほどの金持ちでないことがわかると、ハンサムで金持ちのティルニー大佐に乗り換えてしまうのである。

こうしたイザベラの性格を見抜けないのは、キャサリンの未熟さを示すものである。イザベラも、兄同様、言葉遣いが稚拙で、それが彼女の人格を判断するよい指標である。彼女の特徴は(1)「まあ、本当! 嘘でしょう! ちょっと私に見せて。なんてすてきな方なの! こん

なきれいな人見たこともないわ！」(Oh! heavens! You don't say so! Let me look at her this moment. What a delightful girl! I never saw any thing half so beautiful!)(p.57)に示されるような、わざとらしい大仰な感情表現を好む

(2)「驚くわね」(be amazed) 或いは「驚くほど」(amazingly) という表現を頻繁に使う

(3) 最高級の形容詞を多用する癖がある(My dearest Catherine, the prettiest hat you can imagine など)

(4) 謎めかしたほめかしを好む

(5) 男性蔑視、女同士の友情に厚いというポーズをとる

等で、これを総合すると少女期特有の表現スタイルを持っていると言えるだろう。

だが、彼女の年齢が21歳であることを考えると、これは子供っぽすぎると言えるのではないだろうか。また、彼女は言葉の上では「忠実な女友達」と受け取れることを言うが、行動そのものは打算的である。しかも今言ったことを、次の瞬間には否定するような行動をとるという具合であるから、彼女の言行不一致はお人よしのキャサリンでさえすぐに気がつく程度のものである。彼女とエリナー・ティルニー(22歳)を比べると、エリナーの方が言葉づかい、頭の良さ、マナーのエlegantさという点において、はるかに優れている。さらに、オースティンの他の作品に出てくる打算的で不誠実な女性、例えば、メアリ・クロフォード(Mary Crawford)と比べても、イザベラは頭のよさ、性格の複雑さ、物腰のエlegantさにおいて遙かに見劣りがするのである。

従って、イザベラはリゾート都市にふさわしい軽薄で打算的な女性だと言えるだろう。同様のことはジョン・ソーブを、ヘンリー・クロフォード(Henry Crawford)やフランク・チャーチル(Frank Churchill)と比べても言えることである。

### III

#### ティルニー大佐が登場する意味

ジョンとイザベラはともに主人公を裏切る敵役でありながら、悪人としては小粒である。このことと、彼らの階層(父親はロンドンの弁護士)がキャサリン(父親は牧師)やエリナー(16世紀まで逆上ることのできる旧家)のそれより一段低く見なされていることは、関係があるのだろうか。

パースに登場する三人目の悪人としてティルニー大佐を考えてみよう。彼はティルニー家の跡継ぎで、キャサリンも見とれるほどハンサムな青年である。「流行の服装をした」(a very fashionable-looking young man)(p.131)ティルニー大佐はこの三人の中では誰よりも社会的階層が高いが、誰よりも徳義心が薄い。彼はイザベラがジェームズ・モーランドと婚約中であることを知りながら、なおかつ彼女に近づいてくるのである。

彼には初めからイザベラと結婚するつもりなどない。イザベラのような女性を騙すことに彼は何ら良心の咎めを感じないのである。アナトーリーやエレンのような<sup>17)</sup>放蕩貴族に似た、「非道徳的」(amoral)な態度さえ感じられる。しかも、ヘンリーもエリナーもこうした兄の所業を容認はしないまでも、黙認しているのはどういうわけだろうか。作者もおなじ考えなのだろうか? 上流紳士(貴族)であれば、不倫(flirtation)も許されるというのであろうか。もっとも、彼はほんの少ししか登場しないし、キャサリンが彼の態度を好ましく思っていないことも確かである<sup>18)</sup>。この問題については、同じタイプのより重要な人物、ティルニー将

軍のところまで追及してみるとしよう。

#### ヘンリーとエリナーの助言

ここで、こうした見え透いた虚言を言葉どおりに信用するキャサリンの信じやすさに目を移して見よう。キャサリンは田舎の出であり、未経験でもあることから、彼らの言葉を字義どおりに受け取って、何事も善意に解釈しようとする。だが、イザベラもジョンも言葉とは裏腹の行動をとることが重なるので、さすがのキャサリンも不審を抱き始める。そうしたキャサリンに正しい指針を与え、混乱から抜け出す手伝いをするのが、ティルニー兄妹の存在である。

ヘンリー・ティルニーは茶目っ気 (playfulness) たっぷりにイザベラがキャサリンに与える影響の好ましくないことを指摘してみせる。14章のクリフトンへのピクニックで、キャサリンが「でも以前は、若い男の方々は小説など呆れるほど軽蔑しているのだと思っていました」(But I really thought before, young men despised novels amazingly.) (p.107) と言うのを、彼は聞きとがめる。「呆れるほど」(amazingly) というのはイザベラがよく用いる大袈裟な感情表現である。彼はからかうような口調で「そりゃあ呆れますね。それが本当なら、それは呆れるという気持ちをよく表しています」(It is amazingly; it may well suggest amazement if they do.) (p.107) と言う。キャサリンの浅薄な言葉遣いを諷める場面である。続いて、キャサリンが「でも、本当に『ユードルフォ』はこの世で一番素敵の本だと思いませんか?」と言うと、「一番素敵ですと——あなたは多分きちんとしたとおっしゃるつもりなのでしょうね。それなら製本の如何によりますよ」(“The nicest;—by which I suppose you mean the neatest. That must depend upon the binding”) (p.107) と言う。これもイザベラの影響で「nice」という言葉を新しい意味に用いるキャサリンをからかい (tease)、批判しているのである<sup>19)</sup>。

このようにソープ兄妹の大袈裟な感情表現や流行語を批判する一方で、彼らはキャサリンの飾らない言葉を高く評価する。

“I do not understand you.”

“Then we are on very unequal terms, for I understand you perfectly well.”

“Me?—yes; I cannot speak well enough to be unintelligible.”

“Bravo!—an excellent satire on modern language.” (p.133)

「私にはあなたのおっしゃることがわかりませんわ」

「それでは僕たちは随分不公平な立場にあるわけですね。だって僕はあなたを完璧に理解しているのですから」

「私を?——ええ、私にはわけのわからないような上手な話方などできやしませんわ」

「ブラヴォー!——現代の言語に対する見事な風刺ですよ」

率直さは時に、大きな力を発揮する。キャサリンには単純な真実、言いにくい事実をずばりと指摘する能力がある。こうした能力をヘンリーは高く評価するのである。エリナーもまたキャサリンに劣らぬシンプルな物言いで、キャサリンを(そして読者を)驚かす。ミス・ヒューズという女性を美人だと思うかというキャサリンの問いにたいし、流行の服装をした、態度・物腰のエレガントなミス・ティルニー(エリナー)は次のように答えるのである。

“Not very.” (p.73)

「別に」

イザベラなら、ミス・ヒューズがそれほど美人でなくても、「可愛い人ね、この世で最高に可愛い人の一人だわ」(.... a sweet girl, one of the sweetest creature in the world) (p.40) と答えることだろう。エリナーは口数こそ少ないが、キャサリンがヘンリーに心ひかれていることも素早く察してしまう(10章)。これもイザベラとは対照的である。

だが、そのヘンリーも、キャサリンの問いに答えないことがあった。それは父ティルニー將軍と兄のティルニー大佐の行動に関してキャサリンから問われるときである。たとえば、何故、ティルニー大佐は、イザベラが兄のジェームズの婚約者であることを知っていながら、イザベラに近づくのか、とキャサリンが問うたときである。

"But what can your brother mean? If he knows her engagement, what can he mean by his behaviour?"

"You are a close questioner." (p.151)

「でもあなたのお兄様はいったいどういうつもりなのですか？ もし彼女が婚約しているのを知っているのなら、あの行動はどういうつもりなのでしょう？」

「あなたはきわどいことをおたずねになるのですね」

ヘンリーはキャサリンの質問を「きわどいことをおたずねになるのですね」(You are a close questioner) とはぐらかしてしまった。ここでティルニー將軍に話を戻すことにしよう。

#### IV

##### エレガントな悪人

キャサリンがパースで出会ったティルニー將軍 (General Tilney) は「威圧的な態度の、非常にハンサムな」(a very handsome man, of a commanding aspect)(p.80) 完璧な紳士だった。彼は非の打ち所のないマナーで、しかもキャサリンには最高の敬意を払う。(実は彼には下心があったのである)

『ノーサンガー・アベイ』の一番の「悪人」は、やはり、第二部でキャサリンを自邸ノーサンガー・アベイに招待し、散々厚遇しておきながら、ある夜突如として彼女を家から追い出すティルニー將軍だろう。ジョンとイザベラの嘘はキャサリンも次第にそれと気づくが、ティルニー將軍の嘘だけは最後まで見抜くことができなかった。それだけ彼の「悪人」ぶりは複雑であるということである。

ティルニー將軍の態度で特徴的なのは、彼が親切的な (gallant) 紳士で、愛想がよく、丁寧で、気遣いにあふれ、むしろへりくだりすぎていると言えるほどであることだ。だが、將軍の美辞麗句はキャサリンにとって快いものではなかった。

.... she was far from being at ease; nor should the incessant attentions of the General himself entirely reassure her. Nay, perverse as it seemed, she doubted whether she might not have felt less, had she been less attended to. His anxiety for her comfort—his continual solicitations that she would eat..... made it impossible for her to forget for a moment that she was a visitor. (p.154)

・・・いや、つむじ曲がりと思われるかもしれないが、こんなに世話をやかれなければ、もう少し気楽に感じたのではないかとさえ彼女は思った。将軍が彼女を気遣い——絶えず食べなさいと薦めるので・・・彼女は自分が客であることを一瞬たりとも忘れることができなかった。

キャサリンは始め、将軍のエlegantさにだまされて、くつろげないのは自分に非があるのではないかと思う。

ソープ兄妹にはまねのできない巧みな美辞麗句、完璧なマナーは将軍がソープ家よりは遙かに上流の暮らしをしているからである。彼がパースに来たのは保養のためもあるが、カートニー将軍 (General Courteney)、ロングトン侯爵 (Marquis of Longtown) といった友人たちと会うつもりもあった。将軍は貴族と交友があるのである。

### ノーサンガー・アベイ

ティルニー将軍の性格を現していると思われるのは、彼の自邸「ノーサンガー・アベイ」である。パースがそこに集まる人々の性格をある程度規定したように、「ノーサンガー・アベイ」はそこに住む人々 (ティルニー一家) の性格を規定するのである。

ノーサンガー・アベイは「宗教改革の時代には豊かな修道院だったが、解散したときにティルニー一家の先祖のものとなった」<sup>20)</sup> (a richly-endowed convent at the time of the Reformation, of its having fallen into the Tilneys on its dissolution)(p.142) という由緒ある田舎屋敷 (country seat) である。修道院 (アベイ) というその名前から、イザベラの影響でゴシック小説に耽溺していたキャサリンは、馬鹿げた想像を頭に一杯詰め込んで、「ノーサンガー・アベイ」に出掛けていった。これが第二部の、ゴシックのパロディの枠組みとなっている。

ノーサンガー・アベイでの生活は、パースの都市生活に比べると、土地 (estate) と結びついた田舎地主 (country gentleman) の生活であるということ、かつての荘園領主の生活がそうであったように、強力な家長 (patriarch) のもとにひとつの家族 (family) を構成しているという点に特徴がある。

ティルニー将軍はキャサリンを喜ばすために、自慢の屋敷を案内してまわる。それは、時代を経た建物、モダンな内装で飾り付けた豪華な部屋部屋、その邸宅を取り囲む広い広い庭である。庭には芝生とゴシックの装飾が残る中庭があり、古い木立や良く茂った造林地 (plantation) が見え、切り立った丘の向こうにはパーク (park) が広がっている。キャサリンは屋敷のどこへ行っても便利な設備が施され、召使が忙しげに立ち働いているのに気づいた。ノーサンガー・アベイは上層中産階級の豊かな土地であるというだけではなかった。ティルニー将軍の手によって、それは機械のように組織され、生産的な生活を行っている共同体であったのである。

### ティルニー将軍の趣味

ノーサンガーの生産的な生活を端的に示すのが、菜園の温室だろう。将軍が案内をした中で、彼が最も自慢し、また、キャサリンが最も感心したのは菜園だった。

The number of acres contained in this garden was such as Catherine could not listen to without dismay, being more than double the extent of all Mr. Allen's,

as well as her father's, including church-yard and orchard. The walls seemed countless in number, endless in length; a village of hot-houses seemed to arise among them, and a whole parish to be at work within the inclosure....(p.178)

この庭(菜園)の広いことには、キャサリンも聞いてあきれてしまった。アレン氏の庭の広さの倍以上もあり、父の庭に比べても倍以上あった。それも教会の中庭と果樹園を含めたうえでの話だ。壁の多いことは数知れず、その長いことは、果てがなかった。温室が村をなしてその真ん中に建っているように見え、園内には教区民が全員出て働いているように見えた・・・

將軍は「この庭に匹敵するような庭は、この国のどこにもないだろうと思っている」と言い、さらにこう続ける。

....If he had a hobby-horse, it was *that*. He loved a garden. Though careless enough in most matters of eating, he loved good fruit—or if he did not, his friends and children did. There were great vexations however attending such a garden as his. The utmost care could not always secure the most valuable fruits. The pinery had yielded only one hundred in the last year....(p.178)

・・・もし、私に趣味があるとすれば、これがそうでしょうな。私は庭を愛しとるのですよ。食べることには、余り関心もないが、おいしい果物だけは大好きでしてな——いや、たとえ、自分は好きでなくとも、友人や子供達が好んでおりますからな。だが、これだけの庭となると、世話も大変ですじゃ。最善の管理を以てしても、立派な果実が得られるとは限りません。うちのパイナップル園は、去年など、たった百個しか実が成りませんでした・・・

有能な土地経営者、ワンマンな父親ティルニー將軍の趣味(hobby-horse)は菜園づくりであると言う。「食べることにはあまり関心がないが」と彼は言う。だが、それは彼一流の優雅な表現にすぎない。將軍はキャサリンをウッドストン(Woodston)に案内する計画を立て、ヘンリーに「特別なことは何もしないでよろしい。うちにあるもので十分なのだから」(You may not to put yourself at all out of your way. Whatever you may happen to have in the house will be enough.)(p.210)と念を押す。彼の言葉をその通りに受け取ったキャサリンは、ヘンリーが予定を早めてウッドストンへ帰ると言ったとき、驚きを隠すことができなかった。ヘンリーは豪華な正餐を用意するために予定を早めて帰るといっているのである。

“Oh! not seriously!”

“Aye, sadly too—for I had much rather stay.”

“But how can you think of such a thing, after what the General said? when he so particularly decided you not to give yourself any trouble, because *any thing* would do.”

Henry only smiled.(p.211)

「まさか本気では！」

「ええ、残念ながら——だって僕は残っていたいのですからね」

「でもどうしてそんなことを考えるのですか？ 將軍はああおっしやったじゃありません

か。余計な心配はするな、どんなものでもかまわないのだから、とはっきりとおっしゃいましたのに」

ヘンリーはただ微笑しただけだった。

教訓好きのヘンリー・ティルニーにも説明のしようのない人生の真実がある。將軍の優雅な、耳触りのいい言葉は決して彼の本音を語っているわけではないことを、彼は知っているのだ。將軍の美食家ぶりを知っているヘンリーとしては「微笑するしかなかった」のである。

### 現実のモントーニ

キャサリンはティルニー將軍のエlegantで紳士的な顔の裏に、利己的な俗物心のあることになかなか気づかなかったが、彼が暴君であることにはすぐに気がついた。というのも彼の屋敷での生活がキャサリンにとって、パースほど快適ではなかったからである。その原因がティルニー將軍にあることは彼女にも感じられた。彼は態度こそ懇懇だが、家族の気持ちを思いやるのが少なく、せっかちで、すべて自分の思いどおりに運ばないと機嫌が悪いのだった。そのため、本来ならば、主婦役を勤めるはずのエリナーは名目だけの主婦 (a nominal mistress) (p.225) にすぎない。そうした將軍へのキャサリンのひそかな反発が、次第に鬱屈して、彼を妻殺しの暴君モントーニに置き換えることを可能にしたのである。実際の人殺しとは違うが、精神的な意味での暴君 (tyrant) という点で、將軍はモントーニと同じ存在だったのである。こう考えると、ゴシックのパロディは決してうわつつらをなぞるだけのものではなく、ティルニー將軍という人物の本質をつくものであったとも言えるのである。

では、彼が実際にはどんな悪人だったのか、どんな悪業を行ったのかという問題である。彼は「妻を幽閉」するようなことはしなかったが、始めにキャサリンに最大級の愛想をふりまき、その後で突然、礼儀知らずの乱暴者の本性を現して彼女を屋敷から追い出すように出してしまう。何故、そんなことをしたのだろうか。その理由は簡単である。彼はキャサリンの財産を狙っていたのだ。

ティルニー將軍はキャサリンを資産家アレン氏の相続人と思い込み、次男ヘンリーの結婚相手に好都合とばかりに、キャサリンをノーサンガーの自邸に招待した。ところが、それが思い違いで、キャサリンには財産などないことがわかると、それまでの愛想のよい、懇懇な態度を一変させ、腹立ちまぎれに彼女を屋敷から追い出そうとしたのである。

要するに、礼儀正しいelegantな紳士ティルニー將軍は、ジョン・ソーブやイザベラと同種類の、打算的なつまらない人間にすぎなかったわけである。しかも、將軍の誤解の原因はジョンの誇張癖である。

ジョンは妹のイザベラがキャサリンの兄ジェイムズ・モーランドと結婚することを喜んで、キャサリンの財産を大幅に「誇張して」將軍に吹聴した。彼自身、キャサリンとの結婚を計画していたから、これは背伸びをしたい彼にとって是非必要なことでもあったのである。というのも、新興中産階級のソーブ家にとって、教区牧師であるモーランド家との縁組は、社会の梯程を一段上がることになるからだ。イザベラには財産といえるものは何もなかった。(玉の輿をねらうイザベラは、モーランド氏が息子に年に400ポンドの価値のある寺禄しか譲ってくれず、さらに将来、同額の財産の相続を約束するのが精一杯ということを知ると、ジェイムズ・モーランドとの婚約をつまらないものに思い始める)

一方、ティルニー家はアレン氏よりもさらに資産家だが、ヘンリーはその次男であるから、キャサリンが資産家のアレン氏の相続人であれば嫁としてうってつけである。將軍はジョン・

ソープからアレン氏とキャサリンの財産を「誇大に誇張して」聞かされ、キャサリンを自宅に招く気になったのである。ところが、将軍がロンドンで二度目にジョンに会った時には、イザベラとジェイムズの婚約は破棄され、ジョンもキャサリンにもふられた後だった。それでジョンは今度は「誇大に割り引いて」キャサリンの実家の経済状態を「暴露」したわけである。実際にはキャサリンには3000ポンド（年取ではない）の持参金があるのだが、将軍は無一文と誤解して、腹立ち紛れに彼女を追い出すことにしたのである。

### 結論と教訓

以上のように見てみると、この作品に登場する副次的人物は、パースの部分に登場するものはやや俗で、アベイの部分に登場する者はマナーがエレガントであるという違いはあるものの、本質的には同じ種類の「悪」をかかえていることになる。彼らはまず、(1) 己れの言葉に誠実ではない。そして(2) 打算的である。これらは犯罪ではないが、重大な性格上の欠陥であることには間違いない。彼らの飾った言葉は、彼らの不誠実な人格をおおい隠しており、キャサリン、エリナー、ヘンリーの率直なものといつて対照的である。

こうした不誠実さを、作者はどの程度、「悪」であると考えているのだろうか。ジョンとイザベラについては、オースティンの考えははっきりしている。彼らは永久にキャサリンの尊敬を失い、キャサリンの世界から追放されるのである。だが、ティルニー将軍は？

ティルニー将軍は罰せられない。ティルニー大佐の場合も同じである。だが、ティルニー将軍の場合は、父親の罪を、息子のヘンリーが償う形で決まりがつけられる。つまり、ティルニー将軍がキャサリンに非礼を働いたと知ったとき、ヘンリーは早速、父親に抗議し、けんかをして、そのままフラートンのキャサリンの元へ急行して詫びを言うのである。ヘンリーはその詫びを徹底的なやり方で行う。つまり、家長である父の意志に背いて、「一文無し」のキャサリンに求婚をするのである。

ヘンリー・ティルニーのこの思い切った行動は、ティルニー将軍の非を認め、その償いをさせずにはおかない作者の意図を、間接的にはあるが、表したものと考えられる。パースの部分でヘンリー・ティルニーは、理屈屋で如才のない、茶めつけたっぷりの青年として、作者のパロディの代弁者であった。素早い、断固たる行動で毅然としたモラル・バックボーンを持ち主であることを示した彼は、作者のモラルの代弁者でもあったのだ。

結局、ティルニー将軍も最後には折れて、二人の結婚を認め、物語は「この作品の意図としては、親の横暴を薦めるべきか、子の忠義に報いるべきか」(…… whether the tendency of this work be altogether to recommend parental tyranny, or reward filial disobedience) (p.252) と、軽快に締めくくられる。エリナーが貴族（子爵）と結婚したので、さしもの将軍もヘンリーの結婚を認める気になったというのは、いささか都合のいい解決策だと言わねばなるまい。しかし、ヘンリー・ティルニーという人物を通して、作者のモラルがはっきり示されたということは言えるであろう。

## (注)

- 1) Judith O'Neill (ed.), *Critics on Jane Austen*. University of Miami Press, 1970. See P.6-7.
- 2) Duckworth, Alistair. *The Improvement of the Estate*. Baltimore; John's Hopkins University Press, 1971. Nardin Jane. *Those Elegant Decorums: The Concept of Propriety in Jane Austen's Novels*. Albany: State University of New York Press, 1973. など。
- 3) フェミニズム批評については Kirkham, Margaret. *Jane Austen: Feminism and Fiction*. Sussex; Harvester Wheatsheaf, 1983. 参照。他に、Brown, Julia Prewitt. *Jane Austen's Novels: Social Change and Literary Forum*. Cambridge, Mass.: Harvard U.P., 1979. Morgan, Susan. *In the Meantime: Character and Perception in Jane Austen's Fiction*. Chicago: University of Chicago Press, 1980. Claudia Johnson. *Jane Austen: Woman, Politics and the Novel*. University of Chicago Press, 1988. Tucker, George Holbert. *Jane Austen the Woman*. St. Martin's Press. New York, 1994. オースティン像の見直しについては、ヴィクトリア朝の人であった甥たちと、摂政時代の人であったオースティンとの感覚の違いによるものという指摘もある。Sales, Roger; *Jane Austen and Representations of Regency England*. Routledge, 1994.
- 4) Lascelles, Mary. *Jane Austen and Her Art*. 1939. London: Oxford University Press, 1968. Litz, A. Walton. *Jane Austen: A Study of Her Artistic Development*. New York: Oxford University Press, 1965. 他に Hardy, Barbara. *A Reading of Jane Austen*. New York: New York University Press, 1976. Wright, Andrew. *Jane Austen's Novels: A Study in Structure*. 1953. Harmondsworth: Penguin Books. 等。
- 5) Laski, Marghanita. *Jane Austen and Her World*. London: Thames and Hudson, 1969. Mitton, G.E. *Jane Austen and Her Times*. 1905, Kennetikat Press, 1970. Roberts, Warren. *Jane Austen and the French Revolution*. 1979. The Athlone Press, 1995. MacDonaugh, Oliver. *Jane Austen: Real and Imagined Worlds*. Yale University Press, 1991. Sales, Roger; *Jane Austen and Representations of Regency England*. Routledge, 1994.
- 6) 例えば、鈴木美津子「パースにおける《中心》と《周縁》」(『ジェイン・オースティンとその時代』成美堂、1995)ではN.A.を都市小説として読んでいる。
- 7) 'Introductory Note to *Northanger Abbey*' *The Works of Jane Austen*. Chapman, R.W. (ed.) 1923. Oxford University Press, 1972.
- 8) Chapman, R.W. (ed.) *Jane Austen's Letters*. Oxford University Press, 1932. See p.263-4.
- 9) *Jane Austen's Letters*, p.484.
- 10) *Northanger Abbey*は作者の死後に、*Persuasion*と合本にして、兄 Henry の手で出版された。
- 11) Chapman R.W.. 'Introductory Note to *Northanger Abbey*', *The Works of Jane Austen's Novels*, Vol. V. その理由として、彼は1807年にオープンした Union Street の名が作品中に見当たらないこと、1805年に引退した James King の名が Lower Rooms の饗典長として挙げられていることを挙げている。以上のことから、1803年にはほぼ現在の形で成立していたという Chapman の説は正しいと思われる。  
また、この点については、Fergus も『ノーサンガー・アベイ』には 'free indirect speech' の使用が比較的少ないが、これは初期の作品に共通の特徴で、後期の作品ほど 'free indirect speech' の例が多いと述べている。Fergus, Ian. *Jane Austen: A Literary Life*. Macmillan, 1991. See p.95-6.
- 12) *Jane Austen's Letters*, p.299.

- 13) 拙論「『ノーサンガー・アビー』——事実は小説よりも奇なり、ということ」武庫川女子大学外国文学研究会『外国文学研究』第6号(1987年3月)
- 14) 蛭川久康『パースの肖像』研究社、1990。小林章夫『地上楽園パース』岩波書店、1989。
- 15) Text は *The Works of Jane Austen*. Vol. V. Chapman, R.W.(ed.) 1923. Oxford University Press. 1972. を使用した。p.33.
- 16) Warner, Sylvia Townsend. *Jane Austen Bibliographical Series of Supplement to 'British Book News' on Writers and Their Work*. Longman Green, 1951. See p.5.
- 17) トルストイ『戦争と平和』に出てくる身持ちの悪い貴族。
- 18) *Northanger Abbey* p.132.
- 19) 'nice' はもともと感心しない意味の形容として使われていたのに、18世紀末になって現在のように agreeable の意味で用いられるようになった。O.E.D.中のその意味での初出は1796年。ヘンリー・ティルニーの言葉と作家の視点との関係については惣谷美智子『ジェイン・オースティン研究』(旺史社、1993年)の「《語る人間》ヘンリー・ティルニー」参照。
- 20) ヘンリー 8 世の時の1539年に大修道院解散令が出された。

### Summary

Catherine Morland encounters human evils for the first time at Bath where she makes her entrance into the world. Of the four evil characters, John and Isabella Thorpe are shallow-minded fools whose dishonesty and selfishness Catherine soon comes to discern by their exaggerated speech and pretentious manners. But to Colonel Tilney and General Tilney's insincere, mercenary characters she is blind to the end, because of their elegant speeches and civil manners, though her instincts make her dislike them.

My intention is to see the subtle difference with which the author handles these two kinds of bad people, who come to Bath for amusement: the vulgar Thorpes who come from London, and the elegant Tilneys who come from their country ancestral estate, Northanger Abbey.